

# 大阪商業大学学術情報リポジトリ

商業科高校の大学進学をめぐる指導体制の現状分析  
—商業科出身者の学習経験と教育課程に着目して—

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学商経学会 公開日: 2019-07-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 尾場, 友和, OBA, Tomokazu メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/823">https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/823</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 商業科高校の大学進学をめぐる 指導体制の現状分析

—商業科出身者の学習経験と教育課程に着目して—

尾 場 友 和

1. 問題設定
2. 調査の概要
3. 全国的な商業科の概況と進学状況
4. 進学を支える指導の体制
5. おわりに

## 1. 問題設定

本稿の目的は、かつて職業科と称し、高卒就職を自明の進路としてきた商業科高校に焦点をあて、商業科が大学進学に対しどのように取り組んでいるのか、その現状を明らかにすることにある。

大学全入時代を背景に、大学進学は、もはや一部の高校生だけの関心事ではなくなっている。1990年代から始まった高等教育の規制緩和や18歳人口の減少は、大学受験の裾野を進学校から進路多様校・職業系専門科へと広げた。実際、詳しくは後述するが、最近（2017年）の大学等進学率を1985年と比較すると、普通科が1.6倍、主要な職業系専門科が2.0～4.0倍となり、普通科以外の科で進学率が飛躍的に伸びている。このように大学進学は、高校生の誰もが選択しうる進路の1つとなりつつあり、進学指導はどの学校においても重要性が高まっていると言えるだろう。

では、こうした多様な高校からの大学へのアクセスは、どのようにして可能になるのだろうか。それを紐解く鍵として、中村（2011）は、大学入試における選抜方式の多様化との関連を指摘する。それによれば、一般的に推薦入学制度は、試験科目が少ない、軽量化した選抜方法であるため、大学入試の「マス選抜制」を高める要因の1つになっていると言う。確かに、「平成29年度国公私立大学・短期大学入学者選抜実施状況」（文部科学省2017）によれば、大学入学者のうち推薦入試により入学した学生の割合は35.2%、AO入試が9.1%となり、ほぼ半数近くが軽量化した選抜制度を利用して入学している。さらに別の資料によれば、こうした入学制度の利用者の多くが、職業系専門科出身者である<sup>1)</sup>。このように、推薦

---

1) 山村ら（2010）が調査した選抜方法別の入学者分布（2006年）によれば、全体では一般入試が57.8%、推薦入試が30.2%、AO入試が6.0%となっているにもかかわらず、職業科出身者ではそれぞれ7.3%、72.1%、14.5%とあり、職業科で一般入試を利用して大学進学する生徒の割合が低くなっている。

やAOといった多様な入試制度を背景に、職業系専門科の生徒にとって大学進学し易い受験環境が、大学入試制度の中で生じている。

そうした環境変化の中、職業系専門科から大学進学に関する研究では、推薦入試制度を利用する生徒の学習行動や生活意識に関心が寄せられた。それは、これまで進学しなかった生徒を大学が受け入れることに対して迫られる大学教育の実践現場からの要請に基づくものである(例えば、山村ら 2010)。だが、そうしたかれらの生活や意識の形成に関連がある高校の指導体制については、職業系専門科の進路形成を検討していく上で重要な課題であるにも関わらず、関心があまり寄せられてこなかった。

そこで本稿では、職業系専門科の1つである商業科に焦点をあて、そこでの指導体制について検討していく。商業科を選定した理由は、商業科が学習指導要領で専門科として位置づけられ、一定単位数以上の専門教科・科目が教育課程に配置される必要があるにもかかわらず、主要な職業系専門科の中で最も大学等進学率が高いことにある<sup>2)</sup>。それゆえ、商業科に絞って分析することにより、職業系専門科からの進学をめぐる特徴的な性質が抽出できると考えられる。

以下では、まず調査の概要を提示する(第2節)。次に、商業科の全国的な進路状況や教師による指導観を概観し、全体を俯瞰する(第3節)。さらに、それらを踏まえ、商業科出身者のインタビュー調査により、高校時代、どのような生活や学習を経験してきたのかについて、かれらの出身校の教育課程を参照しながら検討を進める(第4節)。最後にこれらを総括し、本稿の課題について整理する(まとめ)。

## 2. 調査の概要

本稿では、2017年1月に実施した高校時代に商業教育を受けた大学生インタビュー調査を基に、かれらの出身校が作成した資料を参照しながら分析を進める。インタビューは、高校入学前後から進路決定に至るまでの過程について、半構造化した形式により行った。インタビューは、1人あたり40分程度とし、6人の調査協力者から自らの経験について聞き取りをした。なお、本分析では普通科で商業教育を受けていた1人を除き、検討を進めることにする(表1)。

さて、本稿でインタビューデータを基に生徒個々の経験を深く掘り下げる分析方法を採用するには、理由がある。今日において高校から大学への進学ルートは、依然として普通科経路がメインストリームであり、職業系専門科からの進学は傍流にある。それゆえ、既存の調査にある平均値や多数派の意見を代表する方法では、商業科のような数が少ない科を対象とする場合、個々の事情を汲み損ない、そこにある問題性や課題を見逃してしまう可能性がある。そのため、得られた知見を一般化することは難しいが、当事者が置かれている社会的文脈やそこでの経験を理解していくことにより、かれらの世界を豊かに解釈することができる

2) ただし、高等学校学習指導要領によれば、商業科は外国語科目5単位を専門科目の単位数に含めてもよいことになっている。留意されたい。

表1 調査協力者のプロフィール

協力者	出身校(仮名)	出身校の概略 <sup>3)</sup>
Aさん	第一実業高校	1920年代開校した地方都市の周縁部にある工業科併設の学校。県内に大学は少ないが、地域の工業団地に大手企業があり、求人も多い。難易度C。
Bさん	湊高校	明治期に開校した都市近郊の商業科単独校。地域の商業科教育の基幹的な位置にあり、高大連携や地場産業との連携を行っている。難易度B。
Cさん	田園高校	1940年代に開校したベッドタウンの中核市にある商業科単独校。伝統的に部活動が強いが、国公立大学合格などの進学にも力を入れている。難易度B。
Dさん	夢咲高校	1920年代に開校した普通科併設の学校。都市部の町中に位置し、ターミナル駅からも近く交通の便が良い。近年、積極的な学校改革を行い、スポーツや進学指導に力を入れている。難易度C。
Eさん	米田高校	1920年代に開校した商業科単独の学校。都市部から少し離れた郊外に位置し、住宅地に囲まれたところにある。国公立大学合格を目指して勉強合宿などに取り組んでいる。また、部活動にも力を入れている。難易度C。

(桜井・小林 2005)。

筆者は、こうした質的な研究のスタンスにより調査を進め、調査協力者より高校時代の学習生活について聞き取りを行った。その過程において、筆者は、かれらが塾通いや大手予備校の模擬試験の利用といった受験準備を進めるオーソドックスなやり方ではなく、学校の指導体制が受験準備を主導し、かれらが意識的に進路準備を進めていたことに関心を持つようになった。以下では、上記の調査方法により、商業科からの進学をめぐる現状について議論を進めていく。

### 3. 全国的な商業科と進学状況

本節では、商業科の全国的な状況について概観し、商業科からの進学状況を確認する。

まずは、高校全体の中で、商業科がどれくらい設置されているのか、把握したい。1948年の新制高校誕生以降、商業科は量的側面において一定の割合で設置されてきた。現在でも商業科は、普通科に次ぐ2番目に多い科となっている(図1)。だが、一瞥してわかるように、全体の多数を占めるのは普通科であり、かつて19.7%(1970年)を占めていた商業科は、10.3%(2017年)にまで減少している。このように商業科は、高校教育全体の中で一定の割合を占めるものの、多数を占める普通科を尻目に減少傾向にあり、そのプレゼンスは弱まりつつあると言えるだろう。

では、商業科の生徒数は、どのようになっているのだろうか。図2は、学科別に見た生徒数の推移を示したものである。それによれば、図1のように学科数で減少傾向にあった商業科は、生徒数において、その割合はさらに小さくなっている。1965年の商業科の生徒数は、

3) 難易度は、受験案内雑誌が示す合格可能性の偏差値より筆者が3段階(55以上=A、45~55未満=B、45未満=C)に分類したものである。

857,379人と高校生全体の16.9%の割合を占めていた。だが、1995年には449,968人(9.5%)とすでに全体の1割を切っており、2017年では195,190人と全体の6.0%にまで落ち込んでいる。一方、普通科の生徒数は、1985年では、すでに3,730,685人で全体の72.1%、高校生の多数が普通科という状況になっている。こうした状況から判断すると、高校全体において普通科志向が強い状況は、高止まりする一方、商業科では、減少傾向にあり、科の規模も小さくなってきていることがわかる。

最後に、商業科を卒業した後の大学進学状況について見ておこう。図3は、科ごとに分類した大学等進学率の推移をまとめたものである。1985年時点の普通科大学等進学率は、39.3%

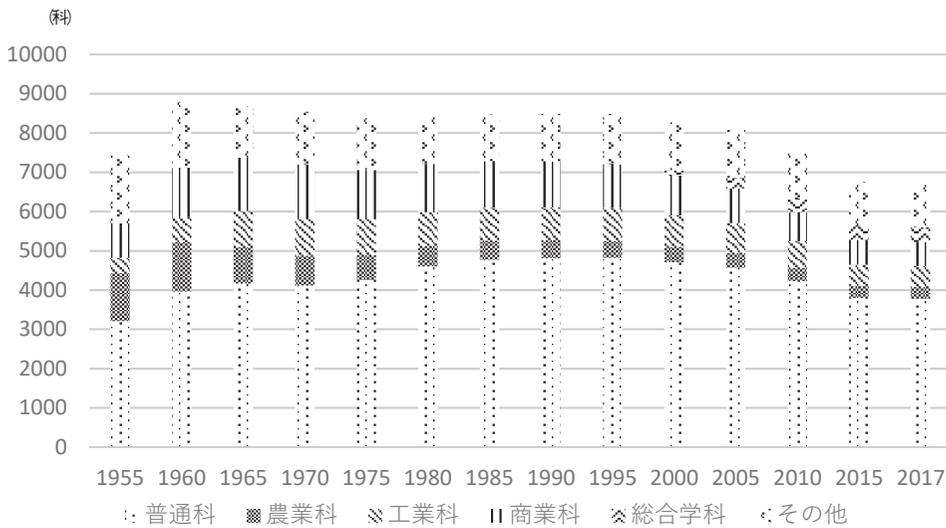


図1 学科数の推移 (本科のみ)<sup>4)</sup>

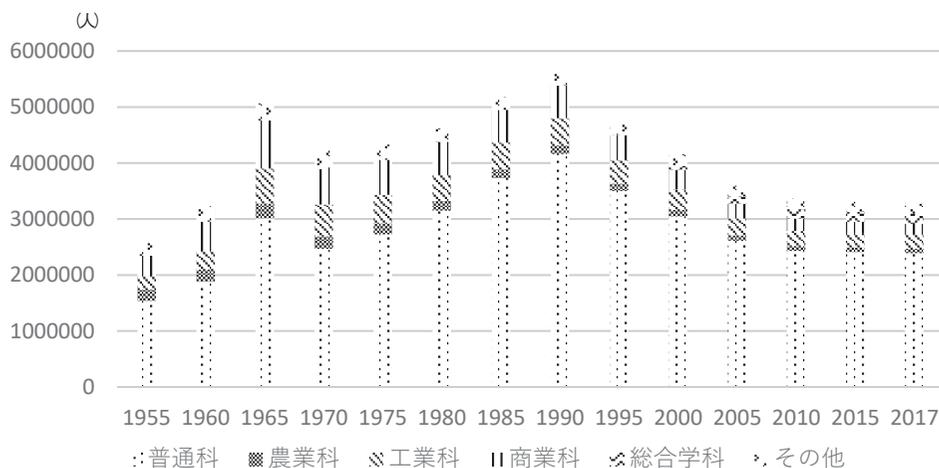


図2 学科別生徒数の推移<sup>5)</sup>

4) 文部科学省「学校基本調査報告書」各年度版より、筆者が作成。

と4割程度であるのに対し、主な専門科は農業科6.5%、工業科7.4%、商業科6.8%のように1桁台で留まっており、普通科と主要職業系専門科の間には、平均5.7倍の進学率の差があった。ところが、30年後の2017年では、高校全体で大学等進学率が伸び、普通科63.9%、農業科14.6%、工業科14.4%、商業科27.2%と高くなっている。1985年と比較すると、普通科1.6倍、農業科2.3倍、工業科2.0倍、商業科4.1倍のように、普通科はもちろん、職業系専門科においても進学率が大きく伸びている。特に商業科の大学等進学率は、ここに示される主要な職業系専門科の中で最も高く、生徒の3～4人に1人の割合で大学等に進学している。このように、高校から大学へのアクセスは、普通科だけでなく専門科にも広がっており、殊に商業科からの進学率は、他の専門科よりも一段高い状態になっていることがわかる。

こうした商業科における進学率の高まりをさらに理解していくために、筆者が2017年に全国の商業高校を対象に行った教員調査(N=156、回収率26.5%)の結果を見ていく。図4は、商業科教員が重視する進路指導について、5段階での回答のうち上位と下位それぞれ2段階の尺度を合算したものである。就職指導に関する「就職試験対策の指導を重視している」の項目では、「とてもそう思う・そう思う」への回答が64.1%あり、6割強の学校が就職指導に力を入れている。商業科が職業系専門科であることを踏まえれば、当然の結果だと言える。だが、大学進学指導に関する「商業科推薦等を利用して私立大学への進学指導を重視している」の項目でも、「とてもそう思う・そう思う」への回答が、54.9%と半数以上の学校で大学進学に力を入れており、さらに「商業科推薦等を利用して国公立大学への進学指導を重視している」といった難関大学への進学指導に対する項目においても、34.0%が「とてもそう思う・そう思う」に回答している。商業高校での進路指導は、就職だけでなく、国公立大学への進学を重視する学校が3割以上あるように、就職させれば事足り、大学に進学させれば事足り、の状況ではない。このように商業科では、就職だけでなく難関大学への進学も実現可能させようというところに、商業科としての特徴があると言える。

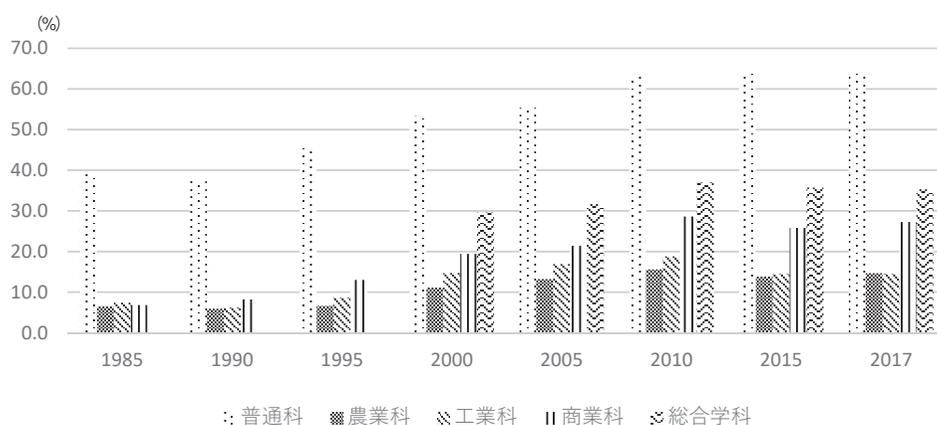


図3 主要学科別大学等進学率の推移<sup>6)</sup>

5) 文部科学省「学校基本調査報告書」各年度版より、筆者が作成。

6) 文部科学省「学校基本調査報告書」各年度版より、筆者が作成。

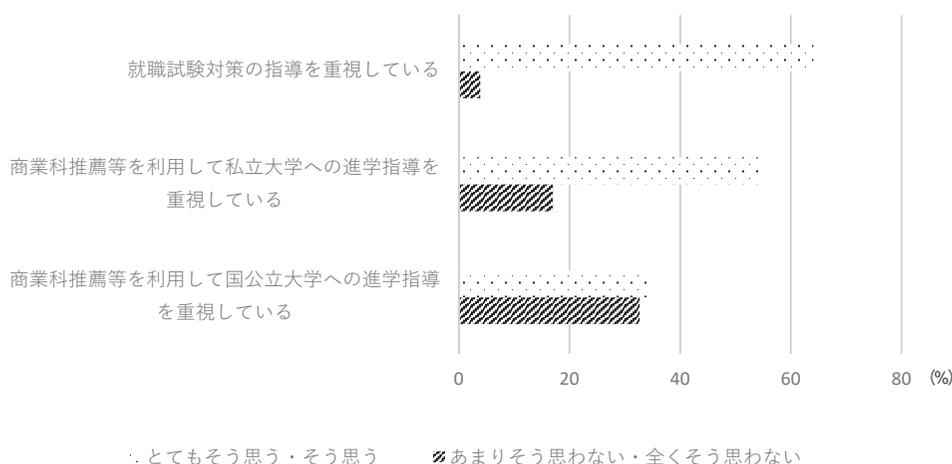


図4 教員による指導の重点

以上、見てきたように、商業科は学科数・生徒数ともに減少傾向にある。だが、進路状況では他の専門科よりも大学等進学率が高く、就職から国公立大学への進学指導にいたるまで、幅広い指導が行われていた。しかしながら、こうした幅広い進路に対応する商業科像は、統計データにより平均値により導き出されている。それゆえ、場合によっては過度に進学重視の学校もあれば、そうではなく就職重視の学校もあるはずである。次節では、調査協力者のインタビューを手がかりに、商業科個々の状況について検討していく。

#### 4. 進学を支える指導の体制

では、そうした商業科において、調査協力者はどのようにして受験準備に取り組み、大学進学を可能にしたのであろうか。次に、かれらの出身校の進学指導体制について教育課程を参照しながら読み解いていこう。

表2は、調査協力者らが所属して高校の学科・コースの教育課程を示したものである。筆者は、調査協力者と教育課程表を見ながら、そこでの学習や経験について対話をし、進学に至るまでの過程を支える学校の指導体制について解釈を行った。

##### (1) Aさんによる第一実業高校での経験

Aさんが卒業した第一実業高校は、Aさんの所属する情報系の科の他に、2つの商業系統の科がある。いずれも、会計や商業英語といった商業科の領域に沿うような形で設定されている。もともと高卒就職を考えていたAさんは、伝統と実績のある第一実業を卒業したほうが普通科より就職で有利だ、と親や中学校の先生から言われ入学した。そうした第一実業高校の就職実績における地域の評判の高さは、Aさんが「もうどこも基本的に就職の方が力入ってますね。」(フィールドノート:2017年1月)というように、就職指導重視の学校だっ

表2 近年における各校の教育課程

35

30

25

20

15

10

5

Aさん・第一実業高校（情報科）

1年	国語	公民	数学	保健体育	芸術	英語	商業	HR
2年	国語	地歴	数学	理科	保健体育	英語	商業	HR
3年	国語	地歴	数学	理科	保健体育	英語	商業	選択
						家庭	選択	HR

Bさん・湊高校（商業科 進学コース（2年次より））

1年	国語	地歴	数学	理科	保健体育	芸術	英語	商業	HR
2年	国語	地歴	数学	理科	保健体育	英語	家庭	商業	HR
3年	国語	地歴	公民	数学	保健体育	英語	商業	選択	HR

Cさん・田園高校（商業科 進学コース（1年次）就職コース（2・3年次））

1年	国語	公民	数学	理科	保健体育	英語	商業	HR
2年	国語	地歴	数学	保健体育	英語	家庭	商業	HR
3年	国語	地歴	数学	理科	保健体育	芸術	英語	家庭
						英語	商業	HR

【参考】田園高校（商業科 進学コース（2・3年次））

2年	国語	地歴	数学	保健体育	英語	理科	保健体育	芸術	英語	家庭	商業	HR
3年	国語	地歴	数学	理科	保健体育	芸術	英語	家庭	商業	HR		

Dさん・夢咲高校（商業科 進学コース（2年次より））

1年	国語	公民	数学	理科	保健体育	芸術	英語	商業	HR
2年	国語	地歴	数学	保健体育	英語	商業	HR		
3年	国語	地歴	数学	理科	保健体育	英語	家庭	商業	HR

Eさん・米田高校（商業科 一般大学進学コース）

1年	国語	地歴	数学	保健体育	英語	商業	HR			
2年	国語	公民	数学	理科	保健体育	英語	商業	HR		
3年	国語	地歴	数学	理科	保健体育	芸術	英語	家庭	商業	HR

たと言えるだろう。

教育課程表によると、第一実業の総単位数は、90単位となっている。最も単位数が多い夢咲高校の教育課程と比較すると、その差は10単位となる。しかも他校にあるような進学コースを設けておらず、生徒が進路や興味に応じて選択できる余地は、3年次の5単位分のみになる。そうした状況の中、Aさんは1年次に全商簿記の2級に合格し、さらに上級資格を目指して夏休みや放課後に学校が用意する資格試験のための補講に参加していたと言う。このように、第一実業では教育課程内の指導だけでなく、教育課程外においても資格取得と関連した指導体制が用意されていた。だが、進学指導となると、「進学は、指定校推薦か専門学校ですかね」（フィールドノーツ：2017年1月）とAさん言うように、大学受験の方法はい

いわゆる高い選抜性を有さない手段に限定されていた。事実、Aさんは、受験すれば確実に通る選抜性の低い入試方式で大学進学を果たしている。このように第一実業高校の指導体制は、資格取得に向けた指導があるものの、進学を選択した場合、受験方法の選択肢は制限されており、ここに第一実業高校の進学指導の特徴があると言えるだろう。

## (2) Bさんによる湊高校での経験

次に、湊高校でのBさんの経験について見ていく。湊高校には、第一実業と同様、商業科の他に商業の領域に特化した科がいくつかある。そうした中、進学コースは、Bさんが所属した商業科にだけ設けられている。商業科の進学コースの存在は、中学時代、進学か就職かに悩んでいたBさんにとって都合が良かったと言う。というのも、湊高校では就職に有利な資格が取れる上に、進学コースに入ること大学進学も可能になると担任教師から聞いていたからだ。Bさんは、そうした湊高校のコース設定を気に入り、湊高校に入学した。

高校では、授業だけでなく、放課後や休みの日も簿記の補習があり、Bさんは日商簿記の勉強をさせられたと言う。湊高校の教育課程と照らし合わせてみると、商業の単位数は確かに多いが、他校と比較するとそう多いわけではない。むしろ選択科目の時間を除く商業の総単位数は20単位となり、学習指導要領が定める商業科としての要件を満たす最少単位数になっている。それゆえ湊高校では、教育課程外の補習により、資格取得に必要な時間数を確保しているようである。また、Bさんは、湊高校の進学コースが商業の他に英語にも力を入れ、英語の検定の受験指導を受けていたと言う。もう一度、教育課程表を見返してみると、湊高校の英語の単位数は、第一実業に比べて2倍も多くなっている。学校案内によると、英語教育を重視する姿勢は学校の成り立ちと関係があるとされる。湊高校で一般入試による難関私立大学に複数名の合格者を輩出している実態を踏まえれば、英語の単位数の多さが大学入試対策と関連していると解釈できる。こうした簿記と英語教育を重視する姿勢は、湊高校の進学に関わる指導の特徴だと言えるだろう。

## (3) Cさんによる田園高校での経験

続いて、田園高校でのCさんの経験について見ていく。Cさんは、高校受験の時、全国レベルで活躍する部活動がある田園高校に魅力を感じ、その部活動に入るために田園高校への受験を希望した。一方、Cさんの親の希望は、子どもを普通科に入れ大学まで行かすことだったため、Cさんの親は田園高校進学に反対していたと言う。だが、Cさんは、商業科でありながら進学コースがあり、進学実績もあることを親に訴え、何とか田園高校進学に進学した。

こうして田園高校に入学したCさんは、1年次から希望通りの進学コースに入った。ところが、Cさんはいくつかの検定に合格するものの、商業の学習内容をさっぱり理解できず、ついには資格の勉強が嫌になってしまった。そこで2年次より、Cさんは就職コースに変更することにした。こうした変更が田園高校で可能なのは、1年次の教育課程が進学コースも就職コースも基本的には同じ科目、同じ単位数だったからである。さらに付け加えれば、2年次以降においても若干の単位数の違いはあるが、Cさんの認識では、進学コースの方が目標とする資格のレベルが高く、就職コースの方はその水準が低いため、その違いは学習への負荷量だけらしい。そうしてCさんは、就職コースに移って資格ではなく部活動に打ち込

み、卒業後は就職するつもりでいた。ところが、これまで全国大会に出場してきたCさんのチームは、県大会で予選落ちしてしまう。そこで急遽Cさんは、この悔しさを大学の部活動でリベンジを果たそうと考え、1年生で取得した資格を使って推薦入試で大学進学した。このように田園高校では、全員に資格を取らせる一辺倒の指導ではなく、指導の濃淡を生徒が柔軟に選択できるようになっていた。こうしたコース変更がどういう意図により制度的に設けられているのか、定かではないが、Cさんは、こうした田園高校の指導体制のおかげで、部活動と勉強を両立させ、大学に進学できたと考えている。

#### (4) Dさんによる夢咲高校での経験

次に、Dさんが卒業した夢咲高校での経験を見ていく。中学時代、勉強が苦手だったDさんは、これまで勉強したことのない科目を頑張って進路につなげようと思い、夢咲高校の商業科に入学した。入学後、Dさんは1年次で全商簿記3級や情報処理の検定、英検3級の勉強に取り組み、それぞれの資格を取得した。そうした1年間の学習は、2年次からの進学コースか就職コースかを選択するための判断材料になるようで、Dさんは努力の甲斐あって希望通り、進学コースに進んだ。

進学コースでは、授業時間が一気に増え、7時間目授業が日常になる<sup>7)</sup>。Dさんは、そうした忙しい日常に加え、放課後の補習や夏休みの講習に参加し、商業関連だけでなく漢検や英検などの資格にもチャレンジし、合格証を手にした。また、その頃になると大学入試を意識するようになり、国語の授業で小論文の書き方を学ぶ。教育課程表を見てみると、1年次からコンスタントに国語の授業があり、他の科目では、2年次で英語の授業が1年次の2倍にあたる8単位に増えている。さらに商業の授業においても、今回取り上げた中で最多となる36単位分の授業時間を確保しており、まさに勉強漬けといったところである。こうした夢咲高校での経験は、Dさんにとって勉強を頑張った良い経験となっており、Dさんは、高校で取り損ねた資格やさらに上級となる資格を大学で取りたいと考えていた。このように夢咲高校では、1年次の学習をその後の学習に対する適性判別期間とし、2年次以降でコース分化により、学習量において大きな違いがあった。こうした指導に濃淡がある特徴は、田園高校にもあったが、夢咲高校ではそれよりも緩急をつけた体制であると言えるだろう。

#### (5) Eさんによる米田高校での経験

最後にEさんが卒業した米田高校について見ていく。Eさんは、中学時代、米田高校を部活動の強豪校として知るようになり、高校受験では、その部活動に入るために米田高校を選んだ。米田高校には、商業科の中に難関大学進学コースと一般大学進学コース、就職コースがある。各コースは、本人の希望と高校入試の成績により、1年次から振り分けられる。入試の結果、Eさんは成績が良く、学校から難関大学進学コースを勧められる。だが、部活動を優先させたかったEさんは、難関大学進学コースでは部活動との両立が難しいと考え、一般大学進学コースを選択した。

7) 一方、就職コース2・3年次の授業時間は、1年次と同じままである。また、Dさんによれば、遠足などの行き先もコースにより違いがあり、進学コースは大学訪問であるのに対し、就職コースではテーマパークだったと言う。

こうしてEさんが選んだコースは、他校と比較しても総単位数は決して多いわけではない。だが、商業科の単位数を見ると、1年次に商業科を13単位配置するものの、2年次以降は、商業科の単位数を徐々に減らし、3年次ではわずか3単位のみを残すだけになっている。こうした教科の配置は、「1・2年次に検定の勉強をし、3年次で大学受験に向けた小論文の勉強をする」(フィールドノート:2017年1月)とEさんが言う学習の流れと一致しているように思われる。というのも、先に見た学年進行に伴う商業科の単位数減少とは裏腹に、国語の単位数は徐々にその数を増やし、3年次には6単位にまで増えている。また、英語の単位数も19単位あり、ここに挙げている学校の中では最も多くなっている。そうした中、Eさんは、検定前には部活動を休んで勉強に集中するなど、メリハリのある生活を送り、日商簿記2級に合格した。まさに文武両道を果たしたのである。このように米田高校の指導体制は、画一的に進学コースを設置するのではなく、受験目標となる大学を設定し、それに応じたコースを設定していた。さらに、教科の履修学年を大学受験勉強の手順に対応させることにより効率よく学習し、部活動と両立できる体制が整えられていたと言えるだろう。

以上、5名の調査協力者の聞き取りにより、かれらの学校経験と教育課程を中心に指導体制を見てきた。それにより、商業科では、簿記や情報などの資格取得が、学校での学習において大きな柱となっていること、補習や講習によって授業を補完する指導の体制があることがわかった。詳しく見ると、そうした取り組みは、本人の希望や成績により量的な調整を行うことができ、進学コース内部での細分化したコースを選択、あるいはそこからの離脱により、資格取得に向けた勉強へのコミットメントの調整が可能になっていた。さらに、こうした指導体制の背景には、商業科特有の受験のイロハがあった。すなわち、1・2年次まで比較的早い段階で商業資格を取得させ、3年次で小論文や英語といった普通教科に力を入れる型である(例えば、田園高校、米田高校)。かれらが口々にインタビューで話していた目標となる大学の受験資格や入試科目は、こうした型と整合性があり、そこには、商業科から進学するためのある種の戦略的なものがあると言えるだろう<sup>8) 9)</sup>。

8) 旺文社編(2018)によれば、入試選抜で日商簿記検定・全商簿記検定などの簿記資格を評価する大学(国立大学:13校、公立大学:8大学、私立大学:164校、情報処理技術者試験・全商情報処理検定試験などの情報処理検定を評価する大学(国立大学:12校、公立大学14校、私立大学:161校)がある。

9) かれらからの聞き取りの中で、受験ターゲットにしていた大学がいくつか挙げられた。かれらは、そうした大学の出願資格を満たすことを、とりあえずの目標と設定し学習していた。例えば、複数の調査協力者が挙げた大阪市立大学商学部の推薦入試では、①商業科20単位以上取得、②大学入試センター試験(国語、数学2科目、外国語)、③日本商工会議所簿記検定2級以上、全国商業高等学校協会簿記実務検定1級、「情報処理技術者試験」の各試験区分のいずれか合格、全国商業高等学校協会情報処理検定(プログラミング部門又はビジネス情報部門)1級のいずれかの該当者、を主な出願資格としていた。他にも兵庫県立大学国際商経学部では、①商業科20単位以上取得、②日本商工会議所主催簿記検定2級以上または、全国商業高等学校協会簿記実務検定第1級(会計及び原価計算の両科目)を出願資格とし、選抜方法は、小論文(英語による出題を含む)、面接となっている。生徒は、まず、こうした検定の資格要件を満たすことに専念することになる。

## 5. おわりに

以上、本稿は、商業科高校に焦点をあて、大学進学指導に対しどのように取り組んでいるのか、その現状について検討してきた。

これまでの議論をまとめると、次のようになる。第1に、高校教育全体から見ると、商業科の学科数・生徒数はともに減少傾向にあり、依然として普通科が量的には主流を占めていた。また、大学全入時代を迎え、専門科からの進学率が高まっており、特に商業科は、主要専門科の中で最も高い大学等進学率になっていた。第2に、商業科では、就職指導だけでなく約3割の学校が国公立大学などの大学進学指導に力を入れ、同じ商業科でも進路指導において重視されるポイントが多様になっていた。第3に商業科では、簿記や情報などの資格取得が学習の大きな柱となっており、授業だけでなく補習・講習によって学習を補完する指導体制があった。第4に、商業科では進路別にコース制を設けている学校があり、進学コースでは就職コースよりも上級資格を取得目標にする、国語や英語の時間が多く設定されている、などの特徴があった。第5に、こうした進学コースは、目標となる大学の受験資格や入試科目を意識した計画が立てられており、そこに商業科からの進学するための戦略的なものが存在していた。

以上のような知見は、大学進学への主要ルートとして認知されてきた普通科経由の進学形態とは異なる、もう1つの進路形成の型と言える。そこでは、番場（2010）が指摘する、商業科が大学全入時代を背景にブランド力の弱い大学が受験生確保のターゲットになっている、大学受験をめぐる社会状況の中、難関大学を目標に卒業生を輩出しようとする商業科における上昇志向の進路指導の一端が明らかになった。こうした商業科は、全体の中で多数派を占めるわけではないが、3割程度の商業科が国公立大学への進学指導を重視していることからわかるように、看過できない状況にある。それゆえ、これからの動向に、引き続き注視する必要がある。

さて、残された課題としては、今回の分析がいわば生徒のインタビューデータを主たる対象にしたため、生徒による指導に対する受容様式については明らかになったものの、個々の学校における教師の側の解釈には限界があった。特に、商業科が職業系専門科という性格を考慮すれば、各校への高卒求人状況や就職指導、その背後にある地域特性は、進学指導体制の構築に大きな影響を及ぼすと考えられる。こうした課題に応答するため、今後は、教師など調査対象者を広げて多声的にデータを収集し、商業高校の進学戦略についてインテンシブに分析を行うことが重要であると考えている。

## 文献

- 番場博之，2010，『職業教育と商業高校—新制高等学校における商業科の変遷と商業教育の変容』大月書店。
- 番場博之・森脇一郎・水島啓進編，2018，『高等学校と商業教育』八千代出版。
- 千葉勝吾・大多和直樹，2007，「進路選択機関としての進路多様校における配分メカニズム—首都圏大都市 A 商業高校の進路カルテ分析—」『教育社会学研究』第81集，pp.67-86。

- 金子真理子, 2002, 「90年代の学校社会学の展開: 選抜・学校内過程・社会変動」『東京大学社会科学研究所紀要社会科学研究』53(1), pp.37-76.
- 文部科学省, 2017, 「平成29年度国公立大学・短期大学入学者選抜実施状況」([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/29/12/1398976.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/12/1398976.htm) 2018.11.30 アクセス).
- 中村高康, 2011, 『大衆化とメリトクラシー—教育選抜をめぐる試験と推薦のパラドクス』東京大学出版会。
- 中村高康 編, 2011, 『進路選択の過程と構造—高校入学から卒業までの量的・質的アプローチ—』ミネルヴァ書房。
- 中西啓喜, 2011, 「地方商業高校の変容: 「高校生文化と進路形成の変容 (第3次調査)」」『青山学院大学教育学会紀要教育研究』55, pp.97-105.
- 中西啓喜, 2012, 「地方商業高校生の進路形成に関する研究: 「地域」を手がかりとして」『Proceedings: 格差センシティブな人間発達科学の創成公募研究成果論文集』22, pp.63-72.
- 中西啓喜, 2013, 「職業系専門学科の変容: 商業科と工業科の比較分析から」『青山学院大学教育学会紀要教育研究』57, pp.73-84.
- 旺文社 編, 2018, 『全国大学推薦・AO入試年鑑』旺文社。
- 岡部善平, 2017, 「職業学科から高等教育への移行における「カリキュラムの有意性」の認識: 商業高校での縦断的調査に基づく検討」『カリキュラム研究』26, pp.15-28.
- 酒井朗 編, 2007, 『進学支援の教育臨床社会学—商業高校におけるアクションリサーチ』勁草書房。
- 桜井厚・小林多寿子, 2005, 『ライフストーリー・インタビュー—質的研究入門』せりか書房。
- 山田浩之・葛城浩一 編, 2007, 『現代大学生の学習行動』広島大学高等教育研究開発センター。
- 山村滋・鈴木規夫・濱中淳子, 2010, 「職業高校からの大学入学者分析—入学方法・進学分野および適応状況」『大学入試研究ジャーナル』第20号, pp.13-21.

## 追記

本研究はJSPS 科研費18K02428の助成を受けたものです。